
2人の秘密

あくあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2人の秘密

【Nコード】

N0995B

【作者名】

あくあ

【あらすじ】

俺には好きな奴がいる。なぜか彼女は恋愛の話しか興味ない。君が好きだと言えない俺がとった行動は：

第1話 俺の嘘

「はぁはぁはぁ…」

俺には好きな奴がいる

『科学室』

ガラッ…

「福留!!!!」

科学室に入ると、観察台に彼女は腰掛けていた

俺に気づくと彼女はMDプレイヤーのイヤホンを外した

「はぁ…良かった…まだいた…」

「お疲れ。」

「…あれ？何聞いてたの？」

「モーツァルト。」

「も…すげえな。」

彼女は少し微笑みながら言った

「んで？今日の話は何？」

「ああ！3組の辻川って言うんだけど、メールしてるうちに好きになっちゃたよ…」

俺がこんな嘘をつくようになったのは、福留と出会ったからだ…

（3ヶ月前）

「まったく…藤川の奴、委員会あるの忘れんなよな」

俺は校内をフラフラ歩いていた

「帰んの遅くなんじゃなか。」

ブツブツ文句を言っていると、ある教室が目に入った

「かと言って1人で帰るのも…」

『科学室』

「（暇つぶしと）」

何も考えずにフラッと教室に入ると、1人の生徒がいた

「だれ？」

彼女は一言そう言うといいつと窓の方を見やった

「えっと……ゴメン…俺、神崎祐司…って言います。」

彼女は何も返答しない

ムダに敬語を使ったのが恥ずかしくなった

「君は？」

「福留…悠」

「2年生？」

「……………」

「なんでここにいるの？」

「……………」

彼女は名前を言っただけで、後は何を聞いても答えてくれなかった

しかし俺はなぜか必死になっていたんだ…

「ねえ…興味のある話とかって…なに？」

自分でも少し驚いた

福留と会話をしたがってる自分に：

「変な人…」

彼女は口を開いた

「初対面の私に必死になってる…」

そして少し笑ってこう言ったんだ

「恋の話とか…興味あるかも。」

俺は完全に惚れていたんだろう

「それでどんな感じの子なの？辻川さんって。」

「それがまた可愛いんだよ！ポニーテールで。見たことない？」

「多分ないかな…ていうか…神崎くんって、惚れっぽいよね。」

「え……………そお？」

ちよっとどきっとした。

「だって一週間に一回くらいはここに来て、新しく好きになった人の話してくれるでしょ？」

「それは……」

福留と会いたいからだよ。なんて言えない

俺が嘘をつき始めたことで、もう彼女とは付き合うこともできないだろう

ただ恋の話に興味のある福留が、俺の話を聞いて笑ってくれたら嬉しいんだ

「まあ惚れっぽいのかな？」

笑ってごまかした

胸の奥の方で何かがちくつとした気がした

「うん。惚れっぽい。でも、一度も上手くないかね？」

そうなのだ

俺は彼氏がいたり、好きな人がいて、

俺には絶対振り向かない子をターゲットにしている

そうすれば何回もこの『科学室』にこれるから…

「悲しいなく俺って。嫌われてるとか？」

苦笑いしながら言うと、彼女はいきなり立って言った

「そんなことないよ!!……あ……嫌われてるわけ無いと思うよ……」
ちよつと頬が赤くなってしまった

「な……なんで？」

「だ……だって……神崎君の話とか……面白いし……」

それはね福留

君が楽しんでくれるように、前日は寝ないで話を作ってるからだ
よ……

「ありがとう。」

そうして俺は教室を出た

「あゝあ……また一週間後にしかあえねえな」

福留は7組

階が違うから、『科学室』以外で会うことはまずない

帰り道、なんだかむなしくなってしまった……

次の日

「神崎君!!」

朝教室に入ろうとしたところを呼び止めたのは、3組の辻川だった

「あの…ちょっと話があるんだけど…」

なんだ?なんだ?

「神崎君が、私のことを好きって噂聞いて…」

は?

俺、福留以外に……あ……藤川に言ったか…?

この間「お前好きな奴いんだろ?」としつこく聞かれたから

「うっせーな!辻川だよ辻川!隣のクラスの!」って言ったんだっ
た…

くっそ!藤川の奴…あとで殴ってやる!!!

「なに?」

冷たく突き放してみた

「あの…私も…神崎君のこと…」

え？

はああ！?!?!?!? まぢかよ!! 確か辻川って彼氏いたんじゃ…

「えっと…辻川さん…彼氏…」

「ああ、結構前に別れたんだ。好きな人出来ちゃったから…」

ちらっと俺の方を見て、照れ笑いしている

やべえ……かなりやべえ……どおしよ……

「じゃあつきあおつか。」なんて言えるか!!!

でもこのままだと俺が嘘つきになって……

「神崎君？」

ああああああ!!!!!!

キンコーン…

「鐘なっちゃった…」

「あ。じゃあこの話はまた今度!!! じゃね!!!」

上手く逃げ切れたと思った

ふうっと廊下の奥を見たとき

この階にいるはずのない福留が、こっちを見ていた気がした

第2話 私に出来ること

彼はいつも笑っていた

笑顔が輝いているあなたをいつしか好きになっていた

あなたはそんなこと全く知らない

この窓から、毎日あなたの姿を追っていた

「福留!!!」

今日も彼がやってくる

私の心は、微笑みながら泣いている

「今日は何の話？」

分かってる

あなたの好きな人の話でしょ？

あなたと知り合えただけで嬉しいの

でもその口からは、私以外の名前しか出てこない

私の胸はまた、何かに押し潰されていく

（3ヶ月前）

「あれ…？いない…」

いつもはもう学校を出て、この窓から見えるはずなのに…

「やだなあ…つまんない…せっかく今日も来たのに。」

私はため息をつきながら窓の外をずっと眺めていた

ガラッ

「だれ？」

ここには誰も来るはずがないのに、今日は思わぬ来客者が来た

嘘……

彼が来た……

毎日遠くから眺めているだけだったのに…

まさか…なんで…？

私の頭は大混乱でパニックになっていた

つい窓の方向に向いてしまった

「えっと……ゴメン…俺、神崎祐司…って言います。」

わかるわかる!! 調べちゃったから!!

「君は？」

喋りかけられた!!!! どどどうしよう!!

「福留…悠」

「2年生？」

嫌だ!! 心臓が破裂する!! ……うう

「なんでここにいるの？」

もう何も言わないで……答えられないよ……

「ねえ…興味のある話とかって…なに？」

え？

なんでそんなこと言うの？

私と話がしたいって言ってくれてるの？

なんだか急に、スッと力が抜けてく気がした…

変な人…

初対面の私に必死になってる…

途中から声が出ていたかも知れない

私は、彼とどうしたら長い時間いられるか一生懸命考えた

「恋の話とか…興味あるかも。」

神崎君が、こういうタイプの人が好きか気になった

まさか、来るたんびに好きな人ができてるなんて思ってたけど

「それでどんな感じの子なの？辻川さんって。」

「それがまた可愛いんだよ！ポニーテールで。見たことない？」

可愛いとか言わないでよ…

「多分ないかな…ていうか…神崎くんって、惚れっぽいよね。」

明日3組に偵察いつてやる…

「え………そお？」

気づいてないのか？

「だって一週間に一回くらいはここに来て、
新しく好きになった人の話してくれるでしょ？」

まあ会えるのは、嬉しかったりするけど…

「それは……」

神崎君が、ちょっと雲った顔をした

「まあ惚れっぽいのかな？」

彼は笑った

胸の奥の方で何かがちくつとした気がした

「うん。惚れっぽい。でも、一度も上手いじゃないよね？」

こんなに笑顔が眩しいのに…

この笑顔にやられる女の子は多いと心底思った

まあ上手くいかれたら私はしばらく学校に来られないし…

「悲しいなく俺って。嫌われてるとか？」

私は急に感情的になってしまった

「そんなことないよ!!……あ……嫌われてるわけ無いと思うよ……」
ちよつと頬が赤くなつたのが分かつた

「な……なんで？」

「だ……だって……神崎君の話とか……面白いし……」

……嫌いと言うより、私はむしろあなたが好きだ

「ありがと。」

そうして彼は教室を出ていった

「切ないなあ……」

なんで好きな人の好きな人の話を聞かなくちゃいけないのよ……

いまさら好きだなんて言えない……

神崎君、惚れっぽいからなあ……

「明日絶対見に行つてやる。」

次の日

「（もし神崎君と会ったら気まずいなあ）」

そう思いながら3組の教室の前に行くと、

ポニーテールの女の子が何かを見つけたのか、1組の方へ走っていった

「（あ。ポニーテール！！あの人か！！）」

行く先をじっと見てみると、彼女は神崎君に話しかけた

「（神崎君……やだ……何を喋る気なの？）」

彼女たちの会話を、恐れながらも聞こうとした

「あの…ちょっと話があるんだけど……」

何言う気？

「神崎君が、私のことを好きって噂聞いて…」

そんな……

「なに？」

「あの…私も…神崎君のこと…」

頭が真っ白になった……

「えっと…辻川さん…彼氏…」

「ああ、結構前に別れたんだ。好きな人出来ちゃったから…」

そう言って彼女は神崎君に目をやった

神崎君はよほど嬉しいのか、黙っていた

「神崎君？」

キンコーン…

「(鐘…)」

その後神崎君が何か行った後、私は彼と目があった気がした…

第3話 バカだった

授業中、なんだか嫌な予感がしていた

福留に見られていたかも……

そんなはずない。と言い聞かせるが

また何度も頭の中で自問自答を繰り返す

1時間目が終わった後、

俺は次の授業をサボる気で

『科学室』へ向かった……

ガラ……

彼女はいなかった

「当たり前だよな……」

その日の放課後、また『科学室』に行った

だれもない……

俺は福留がいつもいる定位置に腰掛けた

「あいつ…毎日来てるワケじゃないのか…?」

そう呟いた後、

窓の外を眺めていた

ガラ…

俺は振り返った

そこに立っていたのは福留だった…

嫌な予感がしてたの…

神崎君は、辻川さんと両思いだった

もしかしたら…もしかしなくても2人は付き合うだろう…

大好きな理科の授業なのに

全く頭に入ってこなかった…

キンコーン…

『科学室』に行きたい

私は席を立った

「あ。福留！これ職員室にもってってくれ！」

「…はい。」

職員室を出ると、次の授業の予鈴がなった

2時間目に『科学室』にいくと

やっぱり彼がいるはずはなかった

「もう来る必要ないもんね…」

なんで自分の気持ちを伝えなかったんだろう…

神崎君の恋が上手くいかないから、

私は甘えてたんだ…

放課後になって、毎日行っていた『科学室』に

これからはもう行かないと決めた…

でも…最後に一度だけ…

身納めておこう…

そう思ってなんだか切ない気持ちでゆっくり向かった

ガラ…

「え…？」

『科学室』には、彼がいた

どうしよう…なんで…もう来る必要はないのに…

ドアが開いたことに気づいた彼は

こっちを見た…

第4話 『科学室』

2人はしばらく見つめ合っていた

お互いに目は悲しそうで…

先に沈黙を破ったのは彼女だった

「神崎君…：今回は両思いになれたね。」

彼は少し顔をしかめた

「やっぱ…：見てたんだ…：」

彼女は少し顔が強張った

「うん…：聞くつもりじゃなかったんだけど…：ごめん…：」

また沈黙が続く

次に沈黙を破ったのは彼だった

「福留…！！あのさ、俺…：」

しかし彼女の言葉に彼は止まった

「わ…私…神崎君に謝りたいことがある…」

彼は不思議そうな顔で彼女を見つめる

「あのね…本当はいつも、思ってたの。」

真剣な顔で彼女の話聞く

「神崎君に好きな人が出来る度、上手くいかなければいいって…」

「……………」

「最悪だよね…本当…」

「福留…」

「それに…!!…………嘘だったの。」

「なにが…?」

「恋の話に興味があるってこと…」

ただ神崎君と話すきっかけが欲しかったただけなんだ…」

彼は彼女をじっとみつめた

「私…」

「福留!!」

彼女はビクリして目を見開いた

「俺も福留に謝らなきゃいけないんだ…聞いて。」

「……うん。」

彼は一呼吸置いて話し始めた

「俺、福留に今まで嘘しかついてなかった。」

「え……」

「俺、一週間に一度『科学室』に来ては、嘘を言ってた。」

「どういこと…?」

「毎回毎回好きな人が出来たって言ってただろ? あれは嘘なんだ。」

彼女は彼を怪訝な目で見つめた

「絶対俺のことなんか好きにならないだろうっていう人を出して好きになったなんてこと言ってた。」

「じゃあ…辻川さんの気持ちを踏みにじってたの?」

「まさか好きになってくれてるなんて思わなかったんだよ。」

「でもそんなの酷いよ!」

「だけど俺本当は…福留が好きだったから!」

「!!!」

「ゴメン…好きな奴に嘘しか言ってなかったなんて…」

「嘘…嘘つかないで…」

「これは嘘じゃない!もう福留に嘘はつかないから!!」

「だって…」

「福留を、ここで初めて見たときから惹かれてたんだ…」

福留…名前しか教えてくれなくて…もっと喋りたいと思って…」

彼女の目からは涙がこぼれていた

「恋の話が好きって言うから…必死になってた。ゴメン…」

「……私が悪い…」

震えた声で彼女は言った

「なんで？」

「私の嘘が、神崎君の嘘を招いて…私達すれ違って…」

「…………それは…………」

「ごめんなさい…」

彼は少し微笑んだ

「謝ってばかりだね…俺たち。」

「…あ。」

「俺、福留から本当の気持ち聞きたい。」

彼女は顔を真っ赤にした

「私…私ね……」

「うん。」

明らかに彼は彼女の言うことを分かっていた

「神崎君のことずっと好きだった!!」

彼は笑った

「うん。俺も。」

彼女も笑った

「バカだね。俺たち。」

「うん。相当だよな。」

2人は窓の外を見ながらいつまでも笑っていた

第4話 『科学室』 (後書き)

結局辻川さんが可哀相で終わってしまいました…すいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0995b/>

2人の秘密

2011年1月26日02時52分発行